

『義なるイエス・キリスト』

ヨハネの手紙 第一 1 章 5 節～2 章 2 節

4 年ほど前に「新感染 ファイナル・エクスプレス」という映画を観た。超高速で走る電車（エクスプレス）という密室の中で、或るウィルスに感染してゾンビとなった感染者が、誰彼構わず襲い掛かって感染者が増えていく。全員がパニックに陥る極限状態の中で、自分だけ助かろうとするか、或いは協力して他者と共に助かろうとするかが描かれている。ゾンビとなった感染者が自分の愛する家族や友人さえも襲い、ゾンビから逃れようと他人を盾にして自分の身を守る人の姿、安全な場所に逃げ込んだ人々が後から逃げ込もうとする人々を拒む姿を描いた場面等は、人間社会の縮図のように思えた。先週、或る本を読みながら、私はイエスと共に十字架につけられた 2 人の犯罪人の姿を思い浮かべた。作家であり教師であった著者が調べ収録した実話や実際のケースに、時代は変わっても人間の内面や本質や罪の性質は変わらないと思った。例えば、あらゆる悪事に手を染めて暗黒街の王と言われた A・カポネは、自分を悪人どころか慈善家だと考えていた。ある刑務所の所長は「およそ受刑者で、自分自身のことを悪人だと考えている者は殆どいない。＜中略＞ あくまでも自分の行為を正しいと信じている。何故、金庫破りをしなければならなかったか、或いはピストルの引き金を引かなければならなかったのか、その理由を実にうまく説明する」と言った。では、聖書の神は人間に何と仰ったか。神は私達に「人間は皆、罪人だ」と仰った。「義人はいない。一人もない」と仰った。ローマ書には、私達がいかに罪人であるかということが具体的に挙げられている。「彼ら（人間）はあらゆる不義（人として守るべき道に外れること、そしてその行いを指す）、悪、貪欲、悪意に満ち、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪巧みにまみれています。また彼らは陰口を言い、人を中傷し、神を憎み、人を侮り、高ぶり、大言壮語（実力不相応な大きなことを言うこと）し、悪事を企み、親に逆らい、浅はかで不誠実で、情け知らずで、無慈悲です」（ローマ 1:29-31）。こうした罪は一体どこから出てくるのか。ローマ書 1 章の前半を見ると、人間が神を知っていながら、神を神として崇めない、感謝もしない、かえってその思いは空しくなって自分の手で神々を作り、自分に対して物言うことのない神々を神として、

その知性が暗くなり、その心は愚かになったとある。多くの人は、これらは自分には当てはまらないと考える。もし、当てはまっても、それにはそれ相応の理由があると思っている。罪を認めることは非常に困難であることを、私達は自分自身のこととして考えなければならない。人には自分の罪を認める代わりに、それから逃れるための 2 つの欺きがあるという。1 つは、「もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いて」いる。（ヨハネ 1:8）2 つ目は、「もし罪を犯したことがないと言うなら、私たちは神を偽り者とする」（ヨハネ 1:10）。罪とは、自己卑下や劣等感とは別物である。自分が神の御心に適わない、神の聖さに程遠い、神以外のものを主人として生きていることだ。自分自身が、或いはあらゆる物が主人になっているのである。つまり、神から離れている状態により、神の基準がそこにないので、結果的に目に見える悪ささえもできるようになってしまう。だから、罪とは何かということを理解した時に初めて、神によってのみ赦される必要があるとわかるのだ。

そのことを彷彿とさせる、有名なテスト・パイロットで航空ショーの花形であった B・フーバーの話がある。彼がサン・ディエゴの航空ショーを無事に終えて、ロサンゼルス of 自宅に向かう飛行中に 300 フィートの上空で両エンジンが止まってしまう。彼の巧みな操縦で緊急着陸し、負傷者は出なかったが、機体は大きく損傷した。着陸後に彼がまず点検したのは燃料だった。彼の予測通り、間違った燃料が積まれていた。飛行場に戻った彼は担当の整備士を呼んだ。若い整備士は自分のミスを知って自責の念に打ちひしがれ、頬には涙が流れていた。すると、彼は項垂れている整備士の肩に手を掛けて、こう言った。「君は二度とこんなことを繰り返さない。私はそれを確信している。確信している証拠に、明日私の F51 の整備を君に頼みたい」。この若き整備士は自らの問題、自分が何をしたかということを理解していた。だから、フーバーはこの整備士は二度と同じことをしないと確信できて、信頼して、あなたに委ねたいと言ったのだ。イエスは失態を犯したペテロのそれを予見して、「あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」（ルカ 22:32）と仰った。「私たちが自分

の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめ」(ヨハネ I 1:9) ようとして、神は私たちの真の姿を私たちに認めさせるのだ。 神は愛だからである。

冒頭の「新感染 ファイナル・エクスプレス」の主人公は、自己中心で生きてきた若い父親だ。幼い娘を別居している妻の元に送るためにそのエクスプレスに乗っていた。彼は自分の娘を愛しているが、娘のことを殆ど知らなかったことに気づく。彼女は他者を気遣う娘だった。パニックが起きて逃げまどう極限状態の中で、転んだ人を助けようとする自分の娘の姿や、身重の妻を気遣う夫の姿、恋人を気遣う若者の姿を目の当たりにした彼の心は次第に変えられ、彼らと協力し合って一緒に生き延びるために全力を尽くすようになる。そこにあるのは、愛する者を救いたいという一念だ。最終的には、彼と、彼の娘と、身重の女性の3人だけが残る。だが、遂に彼も感染してしまう。愛する娘を救うために彼に残された唯一の道は、自分が彼女たちから離れること、自分の命を犠牲にすることだった。失われていく己の理性が尽きてしまう前に、愛する者を救うために電車から落ちていく若き父親の姿に、死に値する者である私たちの罪の故に、そのような者でもただ愛してくださるという理由で十字架に掛けられ、神の前にとりなしの宥めの捧げものとなって死んでくださったイエス・キリストの姿を、私は重ね合わせた。私たちは義なるイエス・キリストの命に代えて生かされた者だ。私たちに義はないのに、神の御子であられる義なるキリストが、私たちのために代わりに死んで、私たちが今生かされている。キリストは言った。「立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」。私たちは様々な経験をしながら、時には打ちのめされ、悲しみや苦しみの中に力を失うこともある。だが、キリストを仰ぎ、私のためにこのお方が犠牲になって、今、私は生かされ、赦されて永遠の命をいただいていることをもう一度覚え、立ち直ったら、兄弟たちを力づける者になりたいと願う。